

インフルエンザワクチンの接種の受け方

監修：川崎市健康安全研究所 所長 岡部 信彦 先生

注意 ① 予防接種を受ける前に

インフルエンザワクチンはその製造工程でふ化鶏卵を使っているため、わずかながら卵由来の成分が残っています。近年は高純度に精製されているのでほとんど問題となりませんが、卵を食べるとじんましんや全身性の発しんが出たり口の中がしびれるような強い卵アレルギーがある場合は、接種を避けるか注意して接種する必要があるため、接種前に必ず医師にご相談ください。また、次の①～④の人はインフルエンザワクチンの接種を避けてください。①37.5℃以上の発熱のある人。②重い急性の病気にかかっている人。③これまでにインフルエンザワクチンの接種を受けてアナフィラキシーを起こしたことがある人。④医師が予防接種を行うことが不相当と判断した人。

注意 ② 予防接種を受けたら



接種日は過激な運動を避けて、注射部位は清潔にしておいてください。



接種日の晩は、熱がなく普段と変わりがなければ入浴しても差し支えありません。


高熱やけいれんなどの異常反応や、体調の変化があれば、速やかに医師の診察を受けてください。



30分以内に急な副反応が起こることがまれにありますのでその間は様子を観察し、医師とすぐに連絡が取れるようにしておきましょう。



ワクチンはインフルエンザの流行前(10月～12月頃)に接種します。生後6カ月～13歳未満の方はおよそ2～4週間隔で2回接種します。13歳以上の方はおよそ1～4週間隔で1又は2回接種します。なお、効果の面から3～4週間隔が望まれます。



次回の注射のときは、反対の腕に、あるいは同じ腕でも前回の注射部位とは違う部位に接種を受けてください。



インフルエンザワクチンでの副反応

副反応は一般的に軽微です。注射部位が赤くなる、腫れる、硬くなる、熱をもつ、痛くなる、しびれる、小水疱がみられることがあります。蜂巣炎に至った症例の報告もあります。過敏症として、発しん、じんましん、湿疹、紅斑、多形紅斑、そう痒、血管浮腫、精神神経系として、頭痛、一過性の意識消失、めまい、顔面神経麻痺等の麻痺、末梢性ニューロパチー、失神・血管迷走神経反応、しびれ感、消化器として、嘔吐・嘔気、腹痛、下痢、食欲減退、筋・骨格系として、関節痛、筋肉痛、筋力低下があらわれることがあります(いずれも頻度不明)。その他に、発熱、悪寒、倦怠感、リンパ節腫脹、咳嗽、動悸、ぶどう膜炎があらわれることがあります。強い卵アレルギーのある方は重篤な副反応を生じる可能性がありますので必ず医師に申し出てください。非常にまれですが、次のような副反応の報告もあります。(1)ショック、アナフィラキシー(じんましん、呼吸困難など)、(2)急性散在性脳脊髄炎(接種後数日から2週間以内の発熱、頭痛、けいれん、運動障害、意識障害など)、(3)脳炎・脳症、脊髄炎、視神経炎、(4)ギラン・バレー症候群(両手足のしびれ、歩行障害など)、(5)けいれん(熱性けいれんを含む)、(6)肝機能障害、黄疸、(7)喘息発作、(8)血小板減少性紫斑病、血小板減少、(9)血管炎(アレルギー性紫斑病、アレルギー性肉芽腫性血管炎、白血球破砕性血管炎等)、(10)間質性肺炎、(11)皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、(12)ネフローゼ症候群。このような症状が認められたり、疑われた場合は、すぐに医師に申し出てください。

インフルエンザとインフルエンザワクチン

インフルエンザの症状は？



典型的なインフルエンザは1～5日（平均2日）の潜伏期間の後、突然に発症し、38℃以上の発熱、上気道炎、全身倦怠感等の症状が出現することが特徴的です。

流行期（日本では例年11月～3月）にこれらの症状があった場合はインフルエンザの可能性が高いと考えられます。症状の持続時間は通常2～3日ですが、場合によっては5日を超えることもあります。また、高齢者や小児、あるいは呼吸器系や心臓などに病気をもっている方がインフルエンザにかかると合併症を併発する場合があります。

細菌の二次感染による肺炎・慢性気管支炎の増悪は高齢者などに起こりやすい合併症です。

また、まれながら小児でのインフルエンザ脳症の報告がありますが、その原因はまだ明らかになっていません。

ワクチン接種で予防を

インフルエンザワクチンの接種で、インフルエンザによる重篤な合併症や死亡を予防することが期待されます。

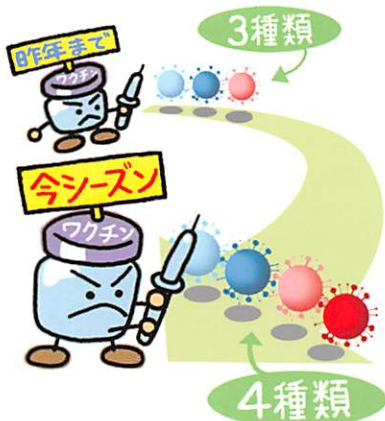
インフルエンザに対しては、ワクチンで重症化を予防することがインフルエンザに対抗する有効な手段なのです。

特に高齢者や基礎疾患（心疾患、肺疾患、腎疾患など）がある方は重症化しやすいので、かかりつけ医とよく相談のうえ、接種を受けることをおすすめします。

なお、インフルエンザワクチンでは他のウイルスの感染による「かぜ」を予防することはできません。



今年のワクチンはどの種類のインフルエンザに効果がありますか？



インフルエンザワクチンは、その年の初冬から流行するウイルス株を予測して製造します。インフルエンザウイルスには大きく分けてA型とB型がありますが、それぞれさらに細かく種類が分かれています。

2014/15年インフルエンザ流行シーズンのワクチンは、A型2種類*とB型1種類の3種類が含まれたワクチンでした。国内外で、インフルエンザB型は2系統（山形系統とビクトリア系統）のウイルスが混合流行していることが多くなってきているので、2015/16年より、A型2種類*とB型2種類の4種類が含まれたワクチンになり、より多くの種類のインフルエンザウイルスによる重症化を防ぐことが可能になります。

※A (H1N1) 亜型（インフルエンザ (H1N1) 2009と同じ亜型）とA (H3N2) 亜型（A香港型）